

介護福祉・健康づくり専門領域

重松良祐（三重大学教育学部）

1. あらまし

「介護福祉・健康づくり専門分科会」（後に領域）は、世界的に例をみない高齢化社会の進行する中で、「介護」「福祉」「健康づくり」といったもっとも切実な研究テーマに勇気を持って取り組むことが必要であるという課題意識をもった人たちが集まり、発足した。2013年には、本専門領域から日本介護福祉・健康づくり学会が設立された（小林, 2014）。そこでは介護、福祉、健康、運動に関する科学的研究並びにその連絡協同を促進し、この分野の研究の発展をはかり、さらに実践に資することを目的としている。また、次のような多岐にわたる内容を含んでいる。①施設や環境づくり、②運動方法や運動実践に関するもの、③機械器具の開発や実施効果に関するもの、④デザインに関するもの、⑤食事・栄養・休養に関するもの、⑥観光・ツーリズムに関するもの、⑦心理・社会・経済に関するもの、⑧文化・芸術・哲学思想に関するもの、⑨ビジネスに関するもの、⑩科学、文化に関するもの。

2. 内外の研究動向

実践研究や事例研究を重視するとともに、介護・福祉や健康づくりの分野で働いている人たちの参考となり、学問的なよりどころとなるような存在になることを意図している。

学会設立日に第1回大会が京都市で開催された。研究者のみならず、医師・保健師・栄養士、実践的指導者、企業関係者など多職種から約100名が参加した。大会プログラムは以下の通りである。①学会のベクトル（小林, 2014）、②先端研究と技術（キーワード：サルコペニア肥満、ICT）、③指定発表（同：低体力者、栄養対策、地域環境、人材育成法）、④地域ケアシステムとドラッグストアの役割、⑤地域システムと他職種連携。

3. 科学的知見の応用の状況

実社会という環境では実験室的な環境での研究と同等の効果を得られない可能性が指摘されている（Glasgow, 2003）。そのため、最近では実験室の研究知見を実社会に適用する手段を構築する研究や、適用しようとする研究が推進されている（重松・鎌田, 2013）。このような研究は「橋渡し研究」と呼ばれている。橋渡し研究法の一例として、RE-AIMというものがある。RE-AIMとは、Reach（対象への到達具合）、Efficacy（介入による効果）、Adoption（介入の採用具合）、Implementation（介入内容の遵守具合）、Maintenance（継続性）の5つの単語の頭字語である。RE-AIMの各要素を測定・評価することで、より良い橋渡し方法を構築していくことを狙っている。本領域では、橋渡し研究の重要性が

高く、これからの研究が待たれている。橋渡し研究についての、さらなる概要については体育の科学（2014年12月号）の特集を参照されたい。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

上述したように、本分野は他分野を包括する側面を持ち合わせている。その面から見ると、学校体育や大学体育に活かせる知見は増えてきている。知見の例を挙げると、①生徒にとって「この授業が好きだ」と言えるような体育授業の有り様は、動機づけ雰囲気や目標志向性によって多様性を帯びている（中須賀ら, 2014）、②青年期では運動の利用価値を理解して取り組むことが運動の実践・継続につながる（上地ら, 2012）、③大学生の痩せや肥満の増加は体力低下に関連している（下門ら, 2013）、④震災は住民の運動・スポーツ時間やスポーツコミュニティの参加を阻害する（高橋ら, 2013）。

一方、運動を本当に必要としている人たちは、「安全」「危険回避」ということを理由に、運動の実施から遠ざけられている実態がある。本領域では、このような人たちについても研究活動の対象にしている（小林, 2014）。

5. 若手研究者へのメッセージ

さまざまな現場で必要とされている情報の交換や、活動の報告、現場の問題に積極的に立ち向かう科学的な姿勢、異分野や関連分野の専門家との交流などを通して、社会的課題に対する具体的な取り組みを勧めていく活動が期待される（小林, 2014）。常に創意と工夫がおこなわれなければならない。従来の研究論文作成等の枠組みにはとらわれすぎない「自由な志」をもって、さまざまな事象に勇気をもって取り組むこと、さらには研究成果としては現れにくい「目に見えない価値」についても十分に認識する態度を保つことが望まれる。

6. 引用文献

- 小林寛道. (2014) 日本介護福祉・健康づくり学会のベクトル. 介護福祉・健康づくり, 1: 5-9.
- Glasgow, R.E., Vogt, T.M., and Boles, S.M. (1999) Evaluating the public health impact of health promotion interventions: the RE-AIM framework. *Am. J. Public Health*, 89: 1322-1327.
- 重松良祐, 鎌田真光. (2013) 実験室と実社会を繋ぐ「橋渡し研究」の方法: RE-AIM モデルを中心として. *体育学研究*, 58: 373-378.
- 中須賀巧, 須崎康臣, 阪田俊輔, 木村彩, 杉山佳生 (2014) 動機づけ雰囲気および目標志向性が体育授業に対する好意的態度に与える影響. *体育学研究*, 59: 315-327.
- 上地広昭, 森丘保典, 尾山健太 (2012) 青少年期における運動志向性と行動変容技法の関係. *体育学研究*, 57: 455-469.
- 下門洋文, 中田由夫, 富川理充, 高木英樹, 征矢英昭 (2013) 大学生における 26 年間の体型と体力の推移とその関連性. *体育学研究*, 58: 181-194.
- 高橋信二, 松原悟, 天野和彦 (2013) 東日本大震災のスポーツへの意識および参加行動に対する影響. *体育学研究*, 58: 309-320.

(2014年6月25日執筆)